

# 日本研究と日本語教育の連携： Assimilation（同化）からExploration（探求）へ

當作靖彦

カリフォルニア大学 サン・ディエゴ校

Association of Teachers of Japanese 会長（アメリカ）

## 【要 旨】

1996年に発表されたアメリカのNational Standards（国家標準）では、外国語教育を他教科の内容と連携させることが、外国語教育のゴールの一つとして提唱されている。また、新しい世界秩序に対応した外国語教育の方向性を示す、2007年に発表されたModern Language Association（現代言語学会）のレポートでも、文化、歴史などのフレームワークの中での外国語教育の重要性が謳われている。このような提言の背景には、内容重視の外国語教育が効果を示す研究結果や外国語教育を単にスキルを与える教科でなく、インテレクチュアルな内容を扱う教科にしようとする努力がある。日本語教育で連携する内容となると、日本研究の内容がまず最初に考えられるが、現在の日本語教育では理想（理論）と現実の間に大きなギャップがあると言ってよい。この大きな原因は、まず言語の基礎能力を培い、それから内容を扱うという2層構造であると言ってよい。小論では、日本語教育と日本研究の内容を連携させるためには、現在の日本語教育、日本文化教育の目標とカリキュラム、評価のパラダイムシフトが必要であることを示し、新しい時代に対応したカリキュラムのモデル開発のため、カリキュラム・デザインの理論化が必要であることを示す。

### 1. はじめに

グローバル化が進む中、アメリカ市民が身につけるべき知識・能力も大きく変化し、高等教育における外国語教育の目標の見直しが行われている。この動きの中、アメリカでは、従来の文法・語彙中心の外国語教育、コミュニケーション能力の獲得を目的とした外国語教育、外国語教育における文化の役割の見直しに関する議論が盛んに行われている。この議論の中で、外国語教育に内容を組織的に取り入れる、いわゆる内容重視の外国語教育により、外国語教育の効果を上げるとともに、時代に即した外国語教育を行おうという動きが出ている。小論では、このようなアメリカの動きを概観し、日本研究と日本語教育の連携の意義を考え、どのように日本研究の内容を日本語教育のカリキュラムに取り入れて

いくつか可能性を探る。

## 2. 21世紀に必要な能力

アメリカの労働省の調査によると、アメリカ人は18歳から38歳までに平均10.2個の異なる職に就く。30年から40年前までは人生を通して1つか2つの職に就き、その限られた職を行う能力のみを必要とした。このような20世紀の人間に比べ、21世紀を生きる人間は多様な能力が要求されていることは想像に難くない。テクノロジーの発達により、国境を越えた経済活動が活発に行われ、人的交流も盛んとなり、知識ベースの経済が主流の現在、21世紀の教育は20世紀の教育とは大きな変化が見られて当然である。しかし、教育分野、特にアメリカの高等教育がこのような変化に効果的に対応しているかは疑問である。今あるものが5年後には古くなる、あるいは存在しない速い変化の時代にあって、今あるものに対応して学生を教育するのではなく、将来を見越して学生の教育を行うことが要求されてきている。

The Partnership for 21st Century Skills (21世紀の技能へのパートナーシップ) は、Apple, Cisco, Dell, Microsoft, Time Warner (アップル、シスコ、マイクロソフト、タイムワナー) などの私企業が参加し、21世紀、教育の場、仕事の場、人生で成功するアメリカ市民を作るために、どのような能力が必要か、どのような教育を行うべきかを提言しているユニークな団体である。この団体は21世紀に成功する市民を作るため、21世紀の教育にあっては6つの分野の知識、能力が大切であると主張している。(Partnership for 21st Century Skills (n. d.))

(1) 英語、ランゲージ・アート (読解)、数学、科学、外国語、市民教育、政治、経済、芸術、歴史、地理など連邦政府のNo Child Left Behind (1人の子どもも取り残さない) 教育法で基本教科とされている教科の内容

(2) 人生を通して学習ができるよう、情報を得るスキル、コミュニケーションを効果的に行うスキル、クリティカルに思考するスキル、問題解決のスキル、対人間関係のスキル、自己判断スキル

(3) 学習スキルを得るためのツール: 情報テクノロジー、コミュニケーションテクノロジー、コンピュータ、コンピュータ・ネットワークなどのテクノロジー、視聴覚機材、メディア、マルチメディアを使う能力

(4) 21世紀という環境で学ぶ能力: 学習者の生活に関連した教育内容、現実社会に基づいた教育内容、学習した内容を現実に応用すること、ほかの学習者、教師、知識を持った人たちと交流する機会を利用する能力

(5) 21世紀に適したコミュニティー、仕事場で必要な能力: 正しい世界観、経済

的リテラシー、ビジネス・リテラシー、市民としてのリテラシー

(6) 21世紀に適した評価、基本教科の内容の習得と21世紀に必要な能力の評価、またそのような評価でいい結果が得られるような教育の方法、内容

21世紀に必要な教科の一つとして外国語もあげられているが、実は以上の能力獲得に果たす外国語教育の役割は大きい。情報を得るスキル、コミュニケーションを効果的に行うスキルは勿論母国語が必要であるが、グローバル化の進んだ現在、英語のみならず外国語の能力を持つことは情報を得るためにも、コミュニケーションを円滑に行うためにも必要である。また、外国語のクラスで扱われるその外国語を話す人たちの文化を学ぶことは対人間関係スキルを身につけるためにも重要である。さらに、外国語と自分の母語、外国文化と自分の母文化を比較対照することにより、自己内省の能力を伸ばし、自己判断のスキルを上げることができる。Harvard Business School (ハーバード・ビジネス大学院)によると、外国語を勉強した学生は創造力が高いと言う(Harvard Business School 2009)。外国語を勉強した学生のクリティカルに思考する能力は、外国語を勉強していない学生よりも高いこと、外国語を勉強する年数が多くなればなるほど、クリティカルに思考する能力が高くなることも指摘されている。(Cooper 1987, Cooper, Yanosky, and Wisenbaker 2008, Webb (n. d.))

### 3. The National Standards for Learning Foreign Language in the 21st Century (21世紀の外国語学習のための国家標準)

1996年に発表されたアメリカの外国語学習のナショナル・スタンダードズ(National Standards Collaborative Project 1996)はそのタイトルが示す通り、21世紀における外国語教育の方向性を示すものであるが、この内容はまさに前節で述べた変化する時代、世界に即したアメリカの外国語教育のとりべき道を示したものである。

従来の(あるいは現在の)外国語教育では、文法と語彙の教育に多少の文化の教育が加わるのが普通であったが、ナショナル・スタンダードズでは、外国語教育のゴール領域は、以下の5つのCに代表される(詳しくは當作 2006を参照)。

- (1) コミュニケーション
- (2) 文化
- (3) 連携
- (4) 比較対照
- (5) コミュニティー

外国語教育の目標がコミュニケーション能力の賦与であることは言うまでもないが、ナショナル・スタンダードでは「コミュニケーション」が現実場面でのコミュニケーションであり、文法や語彙、そのほかの知識、能力を使い、外国語使用者、あるいは外国語テキストとコミュニケーションし、現実のコミュニケーションの目的を果たすことを目標としている。従前の外国語教育では、文化は付随的に扱われることが多かったが、ナショナル・スタンダードでは外国語のクラスの目標として、外国語を話す人たちの文化を分析できるいわゆる文化のリテラシーを身につけることを掲げている。外国語の生教材を使うことと、外国語以外の教科の内容を外国語教育に取り入れることが三番目の目標「連携」である。これまでの外国語教育では文法と語彙の教育が中心で、外国語をツールとして教えることが多かったが、そのツールを使って、話したり、読んだり、書いたりする内容が伴わなかった。ナショナル・スタンダードでは、外国語教育に内容を取り入れることにより、ツール以上の外国語能力の習得を行い、外国語教育をインテリジェントな教科としようとしている。また内容を重視した外国語教育を提唱しているのは、これまでイマージョン教育やバイリンガル教育での内容重視の教育が大きな効果を上げ、より能力の高い外国語使用者を作り出してきたという経験や研究にも基づいている。言語、文化の比較対照を行うためには当然その材料も必要になるわけであるが、そこでも他教科の内容は重要な役割を果たす。他教科の内容はコミュニティーに出ていった時に、母国語話者とコミュニケーションを行う材料ともなるし、その内容は人生を通して外国語、外国文化に親しむ、いわゆるライフロングの学習者を作る動機付けともなる。ナショナル・スタンダードの考えに基づいたカリキュラムは他教科の内容が入ることにより、単なる文法、語彙の記憶、文法規則の反復という単純なスキル以上の、分析、評価、解釈などのクリティカルな思考能力を必要とし、また、高度の内容を理解するためのストラテジー、問題解決能力、創造力などを養うことにもなる。

#### 4. MLA Report on Restructuring Foreign Language Education (外国語教育の再編成に関するMLAのレポート)

2007年に発表されたModern Language Association (MLA: 現代言語学会)のForeign Languages and Higher Education: New Structures for a Changed World (外国語と高等教育: 変化した世界のための新たな構造) (MLA 2007)は変化する社会のニーズに対応するため、アメリカの高等教育における外国語教育がどのように変化すべきかを提言したものである。現在のアメリカの高等教育、特に研究を中心とする大学においては、最初の2年間は基礎的文法・語彙の習得に焦点がおかれ、その後の2年間は文学や文化研究の読解に焦点が置かれるという2層構造を持っているために、高度の能力を持った学生、あるいは現実の生活で使

える外国語能力を持った学生を作ることができない問題点を指摘し、高等教育における新しい形の外国語教育を提案している。一年から四年までアーティキュレーション(コース間の相互関連性)の確立した外国語教育のプログラムを作るため、外国語教育専門の教員と文学や文化研究専門の教員の協力体制を作り、一年から文学や文化研究、地域研究の内容を入れ、最後まで文法、語彙の習得にも力を入れたプログラムの必要性を強調している。30、40年前と異なり、文学の大学院過程に入り、文学研究を続けていく外国語専攻の大学生が少ない現実を鑑み、卒業後の仕事で役に立つ能力を賦与する外国語のプログラムをデザインすることをすすめている。具体的には、卒業生はいろいろな職業に就くので、いろいろな将来の目的に対応できる多様な道筋(multiple paths)を与えられるプログラム、様々な職業で必要とする多様なリテラシー(multiple literacies)を身につけさせるプログラムを提唱している。これにより社会のニーズに対応した高等教育レベルの外国語教育を行おうということである。(Swaffler and Arnes 2005)

#### 5. 新しい外国語教育のアプローチのために

上述のように21世紀に対応した外国語教育確立のために、内容重視の外国語教育をすすめることの必要性は直接的、間接的にいろいろなレベルで主張されている。日本語教育の場合、学生が必要とする文化のリテラシーや、ほかの関連するリテラシーを得るため、また学生のニーズに対応するため、当然のことながら、取り入れる内容は広い意味での日本研究ということになる。MLAレポートが言うような内容重視の外国語教育のカリキュラムを具体的に作り、実施していくためには、我々外国語教育を行うものの認識の変化が必要である。

これまでのアメリカの高等教育の外国語教育では、教育のある母国語話者(educated native speaker)を作ることが明示的、あるいは暗黙のうちに目的となってきた。前節で述べた2層的な外国語プログラムの構造も実はこのような前提のもとに作られ、その内省も行われないうまま、不効率な、非効果的な教育を続けてきたと考えられる。MLAレポートが言うように(MLA 2007)、我々が教えている学生に教育のある母国語話者になることを期待することは無理であり、それを目標とする外国語プログラムはいろいろな問題を内包したものとなる。大人の外国語教育の目標は、教育のある母国語話者と効果的にコミュニケーションができる学習者を作ることであり、そのような目標を立てることにより矛盾のない効果的な外国語プログラムができることになる。教育のある母国語話者とコミュニケーションを行うためには、そのような話者が持っている社会、文化の知識を共有する必要があるし、また、そのような話者が社会、文化をどのようにとらえているか分析するリテラシーも必要になる。これがまさに外国語教育において、文学、文化研究、地域研究などの内容が重要な役割を果たす部分となる。外国語のクラ

スでは、このような内容を自分で探求(explore)し、自分の社会、文化と比較し、客観的に相手、そして自分の社会、文化を眺めることができる能力を身につけることが重要となる。すなわち、外国語教育の目的は母国語話者にassimilate(同化)すること、そのレベルに達することではなく、相手の言語、社会、文化をexplore(探求)し、同等のレベルでコミュニケーションできるようにすることである。

この点に関しては、外国語教育における文化教育の目標も同じであり、相手の文化に同化すること、相手の文化の担い手であるがごとく行動できるようにすることではなく、自分の文化、相手の文化を客観的に探求し、コミュニケーションを円滑に行うリテラシーを身につけることである。相手の文化に同化するのではなく、相手の言語を使う時に自分の文化、相手の文化とも異なる第三の文化を形成することが外国語教育における文化教育の目標である。(Kramersch 1993, Crozet and Liddicoat 1999, Liddicoat 2002)

このような外国語教育、文化教育の目標の見直しに対応し、評価の仕方も変わる必要がある。特に教育のある母国語話者を基準とした言語能力、文化能力の評価基準、それをもとにした言語能力、文化能力の評価方法をやめ、大人の第二言語学習者、第二文化学習者に適切な評価基準、評価方法を開発する必要がある。

ここで主張する内容重視の外国語教育を行うためには、アメリカの高等教育機関で見られる2層構造を取り除くことが必要であるが、実はこれが一番解決の難しい問題かもしれない。最初の2年間を教えるスタッフはテニユア・トラック

(終身雇用に近い制度)ではない外国語教育専門の講師が行い、3, 4年次はテニユア・トラックの文学、文化研究などの専門の教授が担当する大学が多く、これら二つのグループが協力して4年間のアーティキュレーションのあるプログラムを作るということがない大学が多い。また、1, 2年次を教える講師はテニユアを得ることもできず、プログラム・デザインで力を持たないことも多い。3, 4年次を教える教授は自分の専門の内容を教えることに興味はあるが、外国語教育には興味がそれほどないことも多い。MLAの提唱するような新しい外国語のプログラムを作るためにはこのような状況が変わる必要がある。研究中心の大きな大学では変えるのは非常に難しいかもしれないが、小さなリベラル・カレッジ(文系の大学)では、外国語教育専門の講師と文学、文化研究、ほかの分野専門の教授が協力することは比較的簡単かもしれない。

日本語教育の場合に、新しいプログラムを作ったり、プロジェクトをする場合に国際交流基金から助成金が出ることが多いが、国際交流基金の現在のガイドラインでは、日本語教育と日本研究が協働してカリキュラムを作るようなプロジェクトが助成金を獲得することはむずかしい。時代の変化に対応した助成のガイドラインの作成が望まれる。

## 6. 内容重視の日本語教育カリキュラムの開発

言語と内容を統合した言語教育は内容重視の言語教育 (content-based language instruction) として80年代から発達してきた。一言に内容重視の言語教育と言っても、定義は多様で、他教科の内容を外国語のクラスに取り入れているものを指すものから、他教科の内容を外国語を通して教えるというものまでである。このため、純粹に内容を教えることに主眼がある教育をcontent-based instruction (内容重視の教育) と呼び、内容の取り入れ方の違いにより、content-oriented instruction (内容志向の教育)、content-related instruction (内容が関連した教育) と呼ぶものもいるが、これも決まった定義はない。アカデミックな内容を扱う方法をdiscipline-based instruction (専門分野重視の教育) と呼ぶこともある。

Met (n. d.) は内容重視の外国語のカリキュラムはトータル・イマージョンのように内容を一義的に重視するものから、言語を重視し、時々内容を取り入れるものまで連続体をなすとして、2極の間に、内容、言語の重要度によりパーシャル・イマージョン、シェルタード・コース、付属モデル、テーマに基づいたコースがあると分類している。

このようなコースのモデルの多くは、イマージョン・プログラムやバイリンガル・プログラムから出てきたものであり、現在アメリカで行われている内容重視の外国語教育のカリキュラムも、それらをモデルに作られたものが多い。イマージョン・プログラムやバイリンガル・プログラムとは学生の背景が違うため、そのままでは使えない場合も多く、それがcontent-oriented instructionやcontent-related instructionのようなアプローチが出てきた理由とも言える。このようなアプローチもカリキュラム開発者、教師の経験に基づいたものが多く、外国語教育における内容重視の教授アプローチは理論化がイマージョン・プログラムやバイリンガル・プログラムのアプローチに比べて大きく遅れていることは否めない。

大人の第二言語学習独自の立場から開発された内容重視のカリキュラムとしては、ジョージタウン大学のドイツ語学部の内容重視のカリキュラムがある。Byrnes (2006, 2008) が示すように、このカリキュラムは第二言語習得理論やHallidayの言語理論(Halliday (1993))、ジャンルの理論、テキスト理論などに基づいたタスク中心のカリキュラムである。上述のように言語教育、文化教育の目標を見直し、多様なリテラシーの獲得を目的とした理論化が進んだカリキュラムである。Byrnes and Sprang (2004), Crane (2006) 初級から中級、上級と外国語学習の目標、教授アプローチ、教授内容が一貫した、言語の教育と内容の教育が調和したカリキュラムである。このカリキュラムの改革においては、ドイ

ツ語教育を専門とする教師とドイツ文学、ドイツ文化研究などを専門とする教師が協力し、また教授のみならず、講師、大学院生も参加している。日本語の場合には、漢字が存在するため、特に読解の面では、scaffoldingを多用する必要があるが、日本語の内容重視のカリキュラム作成にもアイデアを提供してくれる。

日本語の分野では牛田（2007）のような国際関係、経済学、政治学の内容を日本語のクラスに取り入れるアプローチも見られる。牛田のような具体的なカリキュラムを提示されていないが、堀内(2008)のようなナショナル・スタンダードの文化のアプローチをもとにした内容の外国語教育への取り入れの提案も見られる。

日本語教育においてはカリキュラム・デザインの理論化が非常に遅れており、効果的な内容重視のカリキュラムの作成のためには、第2言語習得理論、言語理論、社会・文化分析、教育・学習理論、教授法の研究を多角的に取り入れて教育アプローチを考える必要があるし、それに対応した教師トレーニング、評価法の開発も重要な課題となる。

## 7. 最後に

小論では、21世紀が必要とする人材の持つべきスキル、能力開発のためには、外国語が重要な役割を果たすことを示し、日本語教育においては、内容、特に関連する日本研究、文化研究、文学研究、地域研究の内容を取り入れることが必須であることを議論した。また、効果的な内容重視のカリキュラムの開発のためには、言語教育、文化教育の目標の見直しが必要であり、現在の同化を目的とした目標をやめ、探求を目標とし、この新しい目標に基づいたカリキュラム・デザインの理論化を進めるべきであることを議論した。

## 参考文献

- Byrnes, Heidi. 2006. A semiotic perspective on culture and foreign language teaching: Implications for collegiate materials development. V. Galloway and B. Cothran (eds.), *Language and culture out of bounds: Discipline-blurred perspectives on the foreign language classroom*. 37-66. Boston, MA: Heinle Thomson.
- Byrnes, Heidi. 2008. Articulating a foreign language sequence through content: A look at the culture standards. *Language Teaching*, 41.1. 97-113.
- Byrnes, Heidi and Sprang, K. A. 2004. Fostering advanced L2 literacy: A genre-based, cognitive approach. H. Byrnes and H.H. Maxim. (eds.) *Advanced foreign language learning: A challenge to college programs*,

- pp. 47–85. Boston, MA: Heinle Thomson.
- Cooper, Thomas. 1987. Foreign Language Study and SAT-Verbal Scores. *The Modern Language Journal*, 71. iv. 381–387.
- Cooper, Thomas C, Yanosky, Daniel J II, and Wisenbaker, Joeph M. 2008. Foreign Language Learning and SAT Verbal Scores Revisited. *Foreign Language Annals*. 41.1. 200–217.
- Crane, Cori. 2006. Modeling a genre-based foreign language curriculum: Staging advanced L2 learning. H. Byrnes (ed.) *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygostky*, pp. 227–245. London: Continuum.
- Crozet, C., and Liddicoat, A.J. 1999 The challenge of intercultural language teaching: Engaging with culture in the classroom. J. Lo Bianco, Liddicoat, A.J. and Crozet, C. (eds.) *Striving for the Third Place: Intercultural competence through language education*, pp. 113–126. Canberra: Language Australia.
- Halliday, M.A.K. 1993. Towards a language-based theory of learning. *Linguistics and Education* 5. 2. 93–116.
- Harvard Business School 2009. *Working Knowledge: A First Look at Faculty Research. Professional Networks in China and America. Q&A with Roy Y. J. Chu.* [<http://hbswk.hbs.edu/item/6129.html>]
- Kramsch, Claire. 1993. *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford University Press.
- Liddicoat, A.J. (2002) Static and dynamic views of culture and intercultural language acquisition. *Babel* 36. 3:4–11. 37.
- Met, Myriam. n.d. *Content-Based Instruction: Defining Terms, Making Decision.* NFLC Report. Washington, D.C.: The National Foreign Language Center
- MLA Ad Hoc Committee on Foreign Languages. 2007. *Foreign Languages and Higher Education: New Structures for a Changed World*. New York: MLA. [[http://www.mla.org/pdf/forlang\\_news\\_pdf.pdf](http://www.mla.org/pdf/forlang_news_pdf.pdf)]
- National Standards Collaborative Project. 1996. *The National Standards for Learning Foreign Languages for the 21st Century*. Lawrence, KS: Allen Press.
- Partnership for 21st Century Skills. n.d. *Framework for 21st Century Learning.* [[http://www21stcenturyskills.org/documents/framework\\_flyer\\_updated-](http://www21stcenturyskills.org/documents/framework_flyer_updated-)

jan\_09\_final-1.pdf]

- Swaffler, J. and Arnes, K. 2005. Remapping the foreign language curriculum: An approach through multiple literacies. New York: MLA.
- Webb, E.L. (n.d.) The Effect of Second Language Learning on Test Scores, Intelligence and Achievement: An Annotated Bibliography.  
[<http://www.glc.k12.gau.us/passwd/tre/ttools/attach/forlang/AnnBiblio.pdf>]
- 牛田英子 2007 「ナショナル・スタンダードの日本語教育への応用」 『世界の日本語教育17』 p. 187-205、国際交流基金日本語国際センター
- 當作康彦 2006 「アメリカにおける外国語教育学習基準」 『日本語学 25 (13) 』 p. 34-45、明治書院
- 堀内仁 (2008) 紛争解決の日本語教育 「文化」を通じての外国語教育と国際関係論の「連携」 Proceedings from the 15th Princeton Japanese Pedagogy Forum. Princeton, NJ: Princeton University.